会議名	第１回播磨町児童発達支援センター検討委員会
日時	令和６年５月２２日　１３時３０分～１５時
場所	播磨町中央公民館　２階　視聴覚室
出席者	播磨町児童発達支援センター検討委員１４名 事務局４名　オブザーバー１名

協議内容（報告事項）

１．開会
２．会長・副会長の選出
３．町長挨拶
４．委員委嘱
５．議事

① 児童発達支援センターの概要について　＜資料１＞

・従来の児童発達支援に加えて、児童発達支援センターは保育所等訪問、障害児相談支援など地域支援の機能の付加を求められている。また児童発達支援センターの中核的機能として、⑴高度な専門性に基づく発達支援・家族支援機能、⑵スーパーバイズコンサルテーション機能、⑶地域のインクルージョン推進の中核としての機能、⑷地域の障害児の発達支援の相談窓口としての機能が求められる。

・こども家庭庁からの通達により、各市町村に児童発達支援センターの設置が進んでいる。他市町へのセンターの設置が進むほど、地元の子どもの利用が優先されるため、播磨町にも早急にセンターの設置が求められる。

② 播磨町の現状・課題について　＜資料２－１～３－２＞

委員

各園とも、多くの支援を必要とする児がいる。支援員も１対１ではなく、１人で複数人を見なければならない。個々に応じた対応ができるように各園力を合わせて取り組んでいる。

委員

療育に繋がっている子は対応方法がわかっているが、繋がっていないお子さんもたくさんいるので、近くに発達支援センターができることで、園との連携がとりやすくなるのではないかと思う。

委員

学童では今年度 520 人が利用しており 12 クラスに 40 人ずつくらいでクラス分けされている。支援の必要なお子さんが増えている状況であり、決して快適とは言えない状況の中で問題行動を起こしてしまう子に対して、保護者の理解が得られないことがある。もっと保護者

に理解をしてもらいたいと思うがどのようにしていけばいいのかが課題だと思う。

委員

乳幼児健診や5歳児子育て相談は支援が必要なお子さんへの初期段階のかかわりとして重要視している。保健師と相談しながら、お母さんの受け入れの準備を観察しながら、町の療育事業の紹介を行っている。播磨町は他市町に比べて就学へのつなぎを頑張っていると思うが、支援センターの設置によって就学後やそれ以降の成人になってからといった長いスパンでの切れ目のない支援を行っていけるよう期待したい。

委員

実感として、診断のつかないグレーの子が増えている印象。また、何もないと言われていたのに小学校に入ってから、実は特性や課題がでてくる子もいる。そういった子たちが取り残されないように、就学後困ったときに相談できる場になれば良いなと思う。

③ そだつ部会ワークショップから見えてきたもの　＜資料３－５＞

児童発達支援センターに求める機能として、⑴相談システムの体制づくり、（相談入口の明確化、家庭の課題整理）⑵それぞれの機関と連携の体制づくり、⑶専門療育のまとめ役、指導役⑷家族支援（親の障がいの捉え方や観察力・関わり方の強化）がある。またセンターと連携はするが、元々ある基幹相談支援センターや自立支援協議会でできることを分けて行っていくことも必要ではないか。

委員

デイサービスが増え、保護者に自由になる時間が増えたことは良いが、働きに出るお母さんがすごく多くなった。親の会や平日に集まるような育成会に入ってくれる人もなかなかいなくなってしまい、保護者へ情報がなかなか伝わらない。親としては、発達検査を行って障害児だと診断されることが非常に怖い。障がいがあるイコールダメな人生になると思っている。もう少し将来を見通せると親も希望を持って、楽になれると思うので、そういった情報をどのように伝えるかが課題。播磨町には、はまなす、ぶぶ、手をつなぐ育成会の３団体があり、春風フェスで啓発活動を行っている。播磨町でもここに行けば必ず助けてもらえるという場所ができれば、保護者の気持ちも楽になるのではないかと思う。

④ 児童発達支援センターの概要、播磨町の現状課題を踏まえて児童発達支援センターに必要な機能について　＜資料３－１～３―４＞

●資料３－３については第２回検討委員会で提案をいただきたい。

委員

支援センターでも、すこし発達が遅れていると心配であるが、検査を受けるなど具体的な話になってくると怖く感じる保護者がいる。まず保護者が窓口に行くまでの垣根を超えるフォローというのも必要だと思う。またダウン症だったら生まれた時から診断されているが、毎回受容を積み重ねていっても終わらない、年齢を追えば追うほどいろんな問題がでてくるが、そのたびにその子の育ちを１から説明しなければならない。そのつらさが保護者にはある。その子の育ちが分かっている中核的な場所があれば、もう少し明るい未来が見えるのではないかと思う。

委員

保護者の思いを組み取りながら、しっかりと見通しが立てていけるようなセンターを目指していけたら

委員

今年度の東はりま特別支援学校は小、中、高で約２９０名、うち播磨町在住のお子さんが４０名いる。小学校～高校では１２年間という長い時間を学校で過ごすことになる。地域で生活していくことを目指して個別支援計画を立てるが、もっと長いスパンでの計画をセンターが担うことができれば、より切れ目のない支援を行うことができると思う。

委員

地域での生活できるように、切れ目のない形で支援を行うためにも、お子さんの小さい時からの情報の一元化は必須であると思う。

委員

何かが起こってから繋がったという方も多い。子供のころにもう少し相談ができていれば、生き辛さも軽減されていたのではないかと思う。次回の検討委員会で、もう少し深いところを検討できれば。

●次回６月２８日（金）の１３時３０分より第２回児童発達支援センター検討委員会開催予定。